

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24300211

研究課題名(和文) スポーツを通じた他者との共感や人間的連帯実現に向けた身体教育の原理的追求

研究課題名(英文) Philosophical research of physical education toward a realization of sympathy and humanistic solidarity through sport

研究代表者

関根 正美 (SEKINE, MASAMI)

日本体育大学・体育学部・教授

研究者番号：50294393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,700,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツを通じた他者理解と人間的連帯実現のための哲学的解釈を行った結果、次のことが明らかになった。まず、他者理解については、以下の通りである。体育やスポーツにおける自己と他者の関わりは「間主観性としての関わり」だけでなく、「間身体性」としての関わりである。スポーツにおける共感の源泉は「尊敬」にあり、これは倫理的振る舞いと生産的・スキルに対する尊敬を意味している。人間的連帯については、以下の通りである。スポーツにおける人間的連帯を可能にするのは、試合を通じた内面的充実である。これが実現される具体的場として、オリンピックが挙げられる。競争を通じた内面の充実に人間的連帯は生まれると結論づけた。

研究成果の概要(英文)：A relation of the self and the others in physical education and sports is relation as "intercorporeality" as well as "intersubjectivity". Athletes would develop a feeling of respect for clean, open and sporting attitude without cheating or unfair action. The former is the respect for moral act, and the latter is the one for productive or skillful performance. Solidarity does not exist unconditionally or formally within the mutual relationships among athletes. A spiritual satisfaction gives solidarity among athletes. We should explore both possibilities, that of going beyond national borders, and that of overcoming generational barriers. Concerning the former, the spirit of fairness and rule following should be valued. The latter, it will require seeing future generations as 'the other' that involves considering the self as the other at the same time. This ensures freedoms for people and contributes to the development of the Olympic movement without being affected by nation-states.

研究分野：体育学(スポーツ哲学)

キーワード：スポーツ 共感 人間的連帯 オリンピック

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二次世界大戦以降の世界は民族や宗教の対立によってもたらされる紛争が終結し、代わってイデオロギーによる対立が続いてきた。しかし、現代は再び民族や宗教の違いによる対立が出現してきている。このような状況の中で、われわれは特定の政治体制や価値観にのみ基づいて生きているのではなく、あらゆる文化に通底する普遍的な倫理を追求していかなければならないと考える。われわれの生きる世界が地球的規模で持続可能な世界であるために、果たしてスポーツに何ができるのか。あるいはスポーツという人間の文化的行為を通してそのような道筋を探ることが可能ではないかとの素朴な疑問が、研究代表者と分担者の間で議論を通じて醸成されてきた。これが研究開始当初の背景である。そしてさらにこのことは、現実のスポーツ文化や体育の問題にも通じることが、研究グループ内での議論を通して明らかになってきた。

(2) 次に、本研究に関連する国内・国外の研究動向および位置づけであるが、S. Eassom (1997) は、スポーツを通じた文化的背景の相違を克服することで他者理解への道を示唆している。また、W. J. Morgan (1988) はイスラム文化圏におけるスポーツ文化の変化と他の文化圏との相互理解を示唆している。これらの先行研究は、異なる共同体の間でのスポーツによる対話の可能性を示唆している。またスポーツ科学が発展する中で、M. McNamee (2005) や、A. Miah, S. Eassom (2002) のように、スポーツのあり方を倫理的に反省する研究も出現している。研究グループは、現在行われているこのような議論に加わり、「他者との共感」や「人間の尊厳」に寄与しうるスポーツ思想を哲学の立場から明らかにしたいと考えた。このようなことから、われわれは、人類の相互連帯とスポーツの可能性を具体的に「他者との共感」や「人間の連帯」という観点から追求することになった。

2. 研究の目的

本研究の問題意識は現代の社会や文化的状況にみられる抗争と葛藤に対し、スポーツに何ができるかといった点から出発している。したがって、本研究の目的は、他者との共感や人間的連帯といった価値がスポーツを通じてどのように生み出され、現代スポーツを通じて実現されるかといった点にある。身体教育学の立場から広く身体運動領域(スポーツ)を対象として、他者との共感ならびに人間的連帯を見出す思想を提示する。このことによって、人々の「よりよく生きること」に、健康面だけでなく実存レベルで寄与したいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究は研究代表者他3名の研究分担者により、計4名で行った。研究グループ内で「共感」に焦点を当てる研究担当と「人間的連帯」に焦点を当てる担当に分ける。

(2) 主に哲学思想の文献研究を基礎とし、実際のスポーツ現象の観察を行って文献研究の妥当性を吟味する。いずれも数値によるデータを根拠にするのではなく、解釈を方法とした。手続きとしては、1年目に他者との共感や人間的連帯の価値そのものについて研究を行い、2年目に諸外国におけるそれらの価値についての調査をもとにスポーツについての具体像を構成する。3年目に現代スポーツの現状について共感や人間的連帯の観点から批判的な分析を行う。最終年にこれまでの成果をもとにスポーツ思想を提示する。

4. 研究成果

(1) 共感(sympathy)とは自己と他者の関わりを基本構造にもつ。これはたとえば日常生活などでは相手への同情などによって引き起こされる。あるいは言語的コミュニケーションによって「対話」として共感が成立する。しかし、身体教育学でこの問題を考えると、共感感情面や言語コミュニケーションに代表される「間主観的」かかわりのみでなく、「間身体的」かかわりの次元で可能になる。この場合の「間身体的」かかわりとは、自己と他者の「身体運動」を通してのかかわりである。これはたとえば、「走るリズムを共有する」「スポーツで全力で戦う」といった経験を通して得られる共感の現象を意味する。このような、いわば「身体的共感」が身体教育として機能しうる場が「体育」という教育活動であることを確認できた。そしてこのことは体育の現状に対する課題・役割についての提言として応用可能である。

(2) スポーツ現象から解釈できる共感について、「いかにしてスポーツから他者との共感が生み出されるか」との問いに対しては、次の点が明らかになった。まず、スポーツから生み出される共感感情は、「同情感情」に基づくよりも「同胞感情」に近いということである。この点をたとえば、「尊敬(respect)」の概念を用いて考察した。「尊敬」は現代オリンピックの基本的価値の一つである。オリンピックなどのスポーツ現象でわれわれは、競技者相互の対抗心が露わになる一方で、試合終了後に競技者同士が健闘を讃え合う姿を目にする。他者との共感に関する当初の問いは、「尊敬」という具体的なスポーツの現場を観察した上で、「スポーツ現象の中で相互の尊敬がどのように成立しうるか」という問いとして提起された。競技者のパフォーマンス発揮について分析的に考察した結果、「アンフェアな行為やチーティングがなく、正々堂々とプレイすること」「素晴らしいパ

パフォーマンスを発揮したこと」の二つに対して「尊敬」の念をいただくことが確定できた。前者は倫理的な振る舞いに対する尊敬であり、後者は生産的・スキルフルな振る舞いに対する尊敬である。これら両者に共通するのは、それらは道徳性を有するとはいえ、感性的な受動性に基づくものではなく、主観的に自ら作り出す理性概念に近いという点である。競技者は勝利に対する個人的な欲望、敗北に伴う嫉妬といった感性界における傾向性に基づくのではなく、自由の所産として相手に対しての尊敬を生み出す。スポーツ現象で見られる共感の一つの形として尊敬が指摘されたわけだが、自由に基づく理性概念に近いという点は、それに近づくための普段の努力を競技者に要請する。

(3) 体育やスポーツの指導現場で「体罰」や「暴力」の問題が起きている。体育やスポーツは激しい闘争状況と他の文化領域とは決定的に異なる過度な身体訓練を必要とする。そこから、体育やスポーツは体罰や暴力と親和性があるのかとの問いが生まれる。この問いに対して、たとえ激しい闘争や過度の身体トレーニングが必須であっても共感や人間的連帯に至る道を探った。これについては、H.レンクが提唱した「民主的トレーニング」を対象にした。民主的トレーニングの定義は、「選手とコーチの共同討議によるトレーニングスタイル」である。これは、1950年代から1960年代にかけて当時の西ドイツのボートチームによって確立された。このスタイルによって引き起こされる典型的な問題がある。それが「内部葛藤と達成力」の問題であった。この内部葛藤と達成力の問題はスポーツのトレーニングならびにコーチングの現場における「自-他関係」である。民主的トレーニングにおいては、トレーニングの初期段階から試合直前の完成型に至るまで、一貫して同調や融和的關係を維持することはあり得ない。ここでは「共感」や「人間的連帯」とは全く異なる事態が成立している。この段階で明らかになったことは、「スポーツで高度に組織化された集団」は融和的關係態ではない点である。われわれは、この民主的トレーニングにおける「内部葛藤と達成力」の問題が合意形成という「チームの連帯」に至るプロセスをS.キルケゴールの思想を援用することで考察した。その結論として、競技者は勝利や達成力の向上という必然性に照らし、自己の限界を知るというプロセスを辿って「合意形成」に至る点が明らかになった。このことが意味するのは、スポーツとりわけ高度な競技スポーツにおいても、選手同士の葛藤や軋轢を通した人間的連帯を期待できる点である。競争が激化しフェアプレイの軽視が見られる今日のスポーツにおいてもなお、選手の連帯が可能であることを「民主的トレーニング」の考察から明らかにした。

(4) スポーツによる人間的連帯が実現される場として、オリンピック大会を考察の対象とした。オリンピックでは、選手は自分の所属する国の単位で試合を行う。異なる国の競技者同士による連帯のパターンで最も理解しやすいのは政治・経済的連帯のパターンである。たとえば、各競技団体が自分たちの競技人口を増やそうとする場合やオリンピック種目への採用を目指して競技者の連帯を推進するパターンである。このような競技種目や競技団体を基軸とした連帯は、一見すると競技者間の結びつきを強めるように思われる。しかし、他の競技団体関係者とは敵対関係にならざるを得ない。政治・経済的連帯のパターンに相互理解や共感を求めるには限界がある。一方で、われわれは、競技者同士の連帯を可能にする実存的連帯を考えた。それは競技団体を超え、利害関係のない連帯である。それはたとえば、武道での記述にみることが出来る。オイゲン・ヘリゲルが記述したように、武道における内部への集中は終わりのない過程である。たとえ競技者間に勝敗が存在していたとしても、相互の精神的満足は可能である。人種の違いや勝敗を超えて、スポーツを通じて連帯することの可能性が競技者の精神的満足に見られる。これが「実存的」連帯の概念であり、オリンピックやスポーツが体現しうる価値である。

(5) 先にわれわれは「政治・経済的連帯」と「実存的連帯」を確認した。両者の関係について言えば、スポーツでは「実存的連帯」の「政治・経済的連帯」に対する優位性を確認できた。その理由は以下の通りである。あるチームや競技者が敗北した場合、勝利と敗北の断絶が生まれる。敗北によって金銭、名誉、社会的地位などの現世的価値が失われるだけであるならば、この断絶は連帯を生まない。スポーツという制度ないしシステムは、至る所でこの断絶を生み出す。しかし、本研究の結論として、敗北を一度受け入れる態度の中に、勝利以外に「自己超克」への機会が自己に対して与えられる構造を明らかにできた。スポーツの現実では勝者よりも圧倒的に敗者が多い。敗北を「自己超克」のスタート地点と解釈し直すことによって、敗北からの競技者同士の連帯可能性を指摘できることになった。敗北によって失われる現世的利益ではなく、「自己超克」による実存的連帯がスポーツからの人間的連帯の重要な契機になると結論づけた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者は下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

関根 正美、近代オリンピックの理念から新たな哲学へ、オリンピックスポーツ文化

研究、査読有、No.1、2015、pp.5-16
Fukasawa, K. The Background and Condition for Respect in Athletics from the Viewpoints of Kant's Notions、運動文化研究、査読有、Vol.25、pp.9-26

〔学会発表〕(計 12 件)

Sekine, M. Olympic and Peace: Structure of individualistic solidarity, 43rd Annual International Association for the Philosophy of Sport, 2015. 9.3, Cardiff, UK.

Sekine, M., Hata, T., Anthropology of Solidarity: From Defeat to Existential Solidarity, 2014 International Association for the Philosophy of Sport, 2014.9.5, Natal Brazil

Hata, T., Sekine, M., What we can get from losing in sporting competition: In defence of excellence and achievement, 6th International Society for the Social Science of Sport Conference, 2014. 12.4-12.6, Kaunas, Lithuania

関根 正美, H. レンクにおける「共同人間性」の概念とスポーツ哲学への展開、日本体育・スポーツ哲学学会第 36 回大会、2014、8.20、筑波大学

Fukasawa, K., Aramaki, A., Beyond the border and changing attitudes: Olympic education as intangible legacy, 2014 International Association for the Philosophy of Sport, 2014.9.5, Natal Brazil

Fukasawa, K., An Attempt at Ideal of Education Goal as one of the Olympic Legacy, 2014 International Sport Science Congress, Korean Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance, 2014. 8.21. Incheon, Korea

Fukasawa, K. The potentiality of respect in athletics and limit of imagination, 2014 International Conference on the Philosophy of Sport Program, 2014. 11.22. University of Taipei, Taipei

関根 正美, オリンピズムの新たな価値と可能性、日本オリンピックアカデミー第 37 回 JOA セッション、2014. 11.30. 学習院女子大学、東京

Hata, T., Sekine, M. Athletes' mental and inner satisfaction and their solidarity in modern sport, 2013 Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport, 2013. 9.5-7. Fullerton, USA

Aramaki, A., Fukasawa, K. Reconceptualization of the Olympic Legacy- from perspective of the public aspect, 2013 Annual Conference of the International Association for the

Philosophy of Sport, 2013. 9.5-7. Fullerton, USA

石垣 健二, 体育学における「間身体性」の問題、日本体育学会体育哲学領域夏期合宿研究会、2013、7.14. 文部科学省共済組合静雲荘、箱根

関根 正美, 劇薬としての民主的トレーニングの効能：自己の変容と他者関係、日本体育学会第 64 回大会、2013. 8.22. 立命館大学、京都

〔図書〕(計 1 件)

Hata, T. et al., Routledge, Handbook of the philosophy of sport, 2015, 98-114

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関根 正美 (SEKINE Masami)

日本体育大学・体育学部・教授

研究者番号：5 0 2 9 4 3 9 3

(2) 研究分担者

畑 孝幸 (HATA Takayuki)

岡山大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：0 0 1 5 6 3 3 2

石垣 健二 (ISHIGAKI Kenji)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：2 0 3 3 1 5 3 0

深澤 浩洋 (FUKASAWA Koyo)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：5 0 3 1 3 4 3 2

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

荒牧 亜衣 (ARAMAKI Ai)